

ワタリガラスが星と月と太陽を盗んだ話

(アラスカ)

この世の始め、光はありませんでした。

この世でいちばん知恵があつたのはワタリガラスでした。ワタリガラスは、けものや魚や木や人間を作りました。生き物はみんな、ワタリガラスが作ったのです。けれども、ワタリガラスは、星と月と太陽を作ることができなかったので、みんなまっくら闇の中に生きていました。

ナース川の岸边に、力を持った一族の長がいました。長は、美しい木の箱を三つ持つていて、その中には、それぞれ星と月と太陽が入れていました。長は、三つの箱と美しいひとり娘を大切に守っていました。

あるとき、ワタリガラスは、この箱を盗もうと考えました。そして、長の家の近くの高い松の木の上に飛びあがつて、松の葉にすがたを変えました。それから、長の娘のコップの中に落ちました。娘は、それに気づかないで、コップになみなみと水をくむと、松の葉ごと飲んでしまいました。ワタリガラスは、娘のお腹に入つて、赤ん坊になり、まもなく息子として生まれました。長は、この孫をたいそうかわいがつて、欲しがるものは何でもあたえました。

あるとき、孫は、星や月と遊びたいといひだしました。そして、おじいさんが箱から出してくれるまで泣き止みませんでした。孫は、星と月を手にとると、家の煙出し穴から外に放り出してしまいました。星と月は、あつという間に空に散らばりました。おじいさんはがっかりしましたが、孫がかわいいので、叱りませんでした。

孫は、こんどは太陽と遊びたいといひだしました。孫は泣き叫んで、泣き止もうとしません。とうとうほんとうに病氣になつてしまいました。おじいさんは、しかたなく太陽の箱をわたしてやりました。孫は、しばらく遊んでいましたが、とつぜんワタリガラスになつて、箱を持ったまま、煙出し穴から飛び出しました。

ワタリガラスが、村から遠く離れた所まで来ると、闇の中で人びとがしゃべっている声が聞こえました。そこで、近づいて行つて、

「おまえたち、光がほしくないか。ほしければ、やろうか」といひました。人びとは、「よくそんなウソがいえるな。光をくれることなんか、だれにもできやしない」と答えました。

ワタリガラスは、美しい木の箱のふたを開けて、太陽の光を放ちました。人びとは、びつくりして逃げだし、世界じゅうにちりぢりになりました。

こういうわけで、今では、世界中のどこにでも人間が住んでいます。そして、空には、星と月と太陽があつて、まっくら闇になることはなくなりました。

村上郁再話

資料『太陽と月と星の民話』日本民話の会・外国民話研究会／三弥井書店